

平成 29 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ヒグチ ケンイチロウ
氏名 樋口 謙一郎

研究期間 平成 29 年度

研究課題名 英国の EU 離脱決定がアジア系移民・居住者の生活に及ぼす影響

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	樋口謙一郎	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究では、英国の EU 離脱決定をめぐって在英のアジア系移民・居住者の生活にいかなる変化が生じつつあるかを考察する。特に、ロンドンおよび近郊都市に居住する中国系と韓国系について具体的な把握を行う。英国の EU 離脱に際しては、EU 域内から同国への移民流入問題が大きな焦点となったことは周知の通りであるが、もとより英国は中国、韓国などのアジア系の移民を数多く受け入れてきている。移民問題が焦点化した後の英国にあって、アジア系の人々が英国での生活にいかなる展望を持ち、仕事、家庭、教育などにいかなる変化を想定しているのかを検討することにより、今後の欧州における多文化主義を考察する素地の確立につなげたい。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

第 1 に、近年における英国の移民流入に関する基本文献の収集・分析を行い、従来の移民受け入れが近年いかなる変容を遂げているのかについて、文献上での確認・検討を行う。

第 2 に、英ロンドンおよび近郊都市のエスニック・コミュニティにおいて、コミュニティメディアや関連事業体・個人に関する資料収集、ヒアリングを行う。

第 3 に、上記の調査結果を、代表者の既往研究である、北米のエスニック・コミュニティのあり方の「変遷」とコミュニケーションへの影響についての研究成果も活用しつつ、英国における移民問題の課題を分析する。

3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

英国の EU 離脱との関連で、アジア系移民・居住者の動向や将来展望を扱った調査研究は意外に少ない。英国の EU 離脱にかかわる移民問題は、2004 年以降に加盟した旧東欧諸国などの 10 カ国からの移民に焦点があてられたものであるが、他方で英国にはアジア系のみならず、インド系、パキスタン系、アフリカ系などの移民やその子孫の世代が住んでいる。EU 離脱をめぐる国論分裂の状況が、英国の移民国家としての現実を顕在化させるのであれば、移民当事者に属する中国系、韓国系の生活の変化と、それが英国社会にフィードバック的に及ぼす影響を考察することは、欧州の多文化主義の将来を展望する上で不可欠である。

このことから、本研究では、次の作業を実施した。第 1 に基礎的な知識集約と先行研究のレビューのため、近年における英国の移民流入に関する基本文献の収集・分析を行い、従来の移民受け入れが近年いかなる変容を遂げているのかについて、文献上での確認・検討を行った。文献は日本語と英語のものが基本しつつ、移民送出国である中国（台湾、香港を含む）、韓国のものも使用した。

第 2 に、英ロンドンおよび近郊都市のエスニック・コミュニティにおいて、コミュニティメディアや関連事業体・個人に関する資料収集、ヒアリングを行った。

第 3 に、上記の調査結果を、代表者の既往研究である、北米のエスニック・コミュニティのあり方の「変遷」とコミュニケーションへの影響についての研究成果も活用しつつ、英国における移民問題の課題の分析に努めた。北米調査の実績を利用した比較研究とすることで、欧州（特に英国）の多文化主義を理論的次元のみならず、具体的な都市・地域における人々の生活の問題として深めていくことを目指し、現在、この作業を実施しているところである。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 項目以上 8 項目以内で記載)

①英国の EU 離脱	②アジア系移民	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

本研究の成果は論文や国際学会発表などにより公表していく。また、文化情報学部の授業（「国際関係論」「グローバル社会論」など）で関連テーマを扱うべく準備を進めている。